

序論

サミュエル・シェフラー

緻密に論じられており真に独創的な本書において、デレク・パーフィットは実践哲学の最も基本的な諸問題のいくつかに取り組んでいます。本書はそれぞれ三部からなる二つの巻から構成されています。本書の中心をなす第Ⅱ部と第Ⅲ部は実質的な道徳の争点を取り扱うものですが、この部分はパーフィットが二〇〇二年十一月にカリフォルニア大学バークレイ校で行った全三回の〈タナー講義〉から来ています。第Ⅰ部と第Ⅵ部では、パーフィットはこのバークレイの講義でカバーしなかつた争点を取り扱っています。第Ⅰ部は理由と合理性についての広範な議論で、これは第Ⅱ部と第Ⅲ部の中の道徳に関する彼の主張の背景を与えます。第Ⅵ部は、理由と合理性の両方に関する主張を行う際のわれわれの規範的言

語の利用が引き起こすメタ規範的問題を取り上げます。

パーフィットのバークレイの〈タナー講義〉に応答した三人のコメントイター——トマス・スキヤンロン、スーザン・ウルフ、アレン・ウッド——は、第Ⅳ部で彼らのコメントの改訂版を提出します。それに加えて、バークレイの時には参加者でなかつたバーバラ・ハーマンが本書のため特別に書いたコメントを寄稿しています。パーフィットはこれらのコメントのすべてに第Ⅴ部で答えます。彼とコメントイターたちとの間のやりとりは、主としてバークレイの講義から来た部分に焦点を当てています。

パーフィットは道徳に関する部分で、道徳哲学の領域を再確定しようとしています。この分野の授業を受ける学生は通常次のように教えられます。——帰結主義者とカント主義者との間には根本的な意見の不一致がある。前者は行為の正しさはその帰結全体だけの関数だと信じているが、後者は——しばしば「定言命法」の何らかのヴァージョンに言及して——われわれは帰結主義的に最善の結果がもたらされるか否かにかかわらず果たさねばならないある義務を負っていると論ずる。帰結主義者の見解もカント主義者の見解も多くのバリエーションと洗練を容れると認められているが、両者の間の区分が深く根本的だということは、ほとんどの帰結主義者とカント主義者を含む、ほとんどの哲学者の認めるところである

本書の第二部と第三部におけるパーフィットの一次的な目的は、この想定を掘り崩して、われわれが相互に敵対者だとみなすことに慣れている複数の立場の間に驚くべき収斂があると証明することです。パーフィットはまずカント自身との道徳哲学の厳正な検討から始めますが、その中には定言命法やその他のカントの中心的な道徳観念の多くの、彼によるさまざまな定式化が含まれています。カントの倫理学の著作、特に『道徳形而上学の基礎づけ』は道徳哲学の歴史の中で最も広く論じられているものの一つですが、これらのテクストへのパーフィットの取り組みは豊かで新鮮な観察と洞察をもたらします。

パーフィットの序文からも明らかのように、カントに対する彼の態度は複雑でたやすく要約できません。彼はカントを「古代ギリシア人以来最大の道徳哲学者」（第1巻29頁）と呼び、「わずかに四十ページの火花の滝の中で、数世紀間の哲学者を全部集めたよりも多くの、新しい実り豊かな観念をわれわれに与える」（同29頁）と言います。しかしながらパーフィットはすぐに、「カントがそれほど多くのことを達成できた原因である資質の一つは、首尾一貫性の欠如だ」（同29頁）とつけ加えます。多くの解釈者ははつきりとカントの見解の批判者か擁護者として現われますが、パーフィットのア

プローチはそれとは違います。彼はカントのテクストを、優れた同時代人の観念に与えるのと同じ真剣さをもつて取り扱うに値するが、その多くは明確化か改訂を必要とし、そのいくつかは単純に使い物にならない、主張と議論と観念の宝庫として取り扱うのです。パーフィットはこれらの広範な主張と議論と観念を検討し、精査にさらしますが、それは焦点が定まっていることと分析力の強さによって注目すべきものです。パーフィットの一次的な目的はカントを擁護することでも批判することでもなく、彼の観念のどれを用いればわれわれは道徳哲学において進歩できるのかを確定することです。結局のところ、パーフィットの本当の目的は進歩なのです。カントの定式の一つを改訂すべき理由を説明する際にパーフィットが言うように、「偉大な哲学者たちの著作から学んだ後で、われわれはもつと進歩しようとすべきだ。巨人の肩の上に立つことで、われわれは彼らよりもさらに遠くを見ることができかもしれない」（同32頁）。

パーフィットはカントの思想の中で、彼が特に重要だとみなし支持する用意のあるいくつかの要素を特定しますが、それにはいくつかの重要な改訂と追加がしています。しかしながら、これらの観念の内容と含意の解釈の仕方においてパーフィットは他の指導的な解釈者たちとしばしば意見が異なります。おそらくこのことは、「普遍的法則の定式」として

知られる定言命法のヴァージョンの取り扱いにおいて一番明らかでしよう。パーフィットが言うように、定言命法のこの定式は実にたくさんの深刻な反論にさらされてきたので、他の点では共感を示す解釈者の多くも、これは正と不正を区別するのに役立つ行動指導原理としてはほとんど価値がないという結論に至ってきました。多くの指導的なカント学者が、定言命法の他の定式の方が豊かで啓発的だという結論に達してきたのです。

パーフィットは対照的に〈普遍的法則の定式〉の中に大きな可能性を見出します。支配的な解釈に逆らって、彼はこの定式は「役に立たせることができる」と主張し、「全体的にカント的なある仕方では改訂すれば、この定式はめざましく成功する」(同325-326頁)と論じます。実際、パーフィットはこの定式を適切に改訂したヴァージョンは「カントが見出そうとしていた、道徳の至上の原理であるかもしれない」(同377頁)とまで言っています。

パーフィットが支持する〈普遍的法則の定式〉の改訂ヴァージョンは「誰もが、その普遍的受容を誰もが理性的に意志できるような原理に従うべきである」というものです。一種の普遍的な選択あるいは合意に訴えかけるこの定式は、「契約主義」の一形態としての資格を持っています。そしてパーフィットはこれを「カント的な契約主義の定式」と呼びます。

このように解釈されると、カント的な立場は契約主義の今日のヴァージョン、特にそれら自体が広い意味でカント的な発想を持ったヴァージョンとの比較を誘います。ジョン・ロールズが無知のヴェールの下で選ばれるであろう原理に訴えかけたことはその一例です。もっともロールズは、この道具をほとんどもっぱら社会の基本的構造のための正義原理の選択のためにしか適用しませんでした。この同じ道具がもっと一般的に道徳原理の選択に適用できるかもしれないという考えを、ロールズはかつて『正義論』の中で一時的に持っていたのですが、彼はこの考えを追究しませんでした。しかしながらパーフィットはこの考えを厳しい批判にさらし、これは道徳の一般的説明としてはトマス・スキャンロンが発展させたヴァージョンの契約主義よりもはるかに有望でないという結論に達します[51節]。

パーフィットの言い方では、「スキャンロンの定式」は「誰もが、誰もが合理的に拒否できない原理に従うべきである」とするものです。少なくともいくつかの解釈によれば、普遍的受容を誰もが理性的に意志できる原理とは、誰もが合理的に拒否できない原理とまさに同じものだということになるだろうから、〈スキャンロンの契約主義〉と〈カント的契約主義〉とは一致する、とパーフィットは論じます。契約主義のこの二つの形態が一致するという可能性は大して驚くよ

うなことではないと思われるかもしれませんが——もつともパーフィットとスキャンロンは、両者が一致する正確な範囲について意見が異なるのですが。それよりも驚くべきことは、契約主義と帰結主義の間の関係に関するパーフィットの評価です。

すでに述べたように、カント主義と帰結主義との間の対立は深く根本的なものと普通考えられてきましたし、今日の契約主義はロールズのものもスキャンロンのものも、かなりの程度まで、帰結主義に対する説得的な代替案を明確化したいという欲求が動機になっています。ところがパーフィットは、カント的契約主義は実際には「規則帰結主義」を含意していて、これは「誰もが、その普遍的な受容が物事を最善にさせるであろう諸原理に従うべきである」とするものだ、と論じます。誰もが普遍的な受容を理性的に意志できる諸原理とは、まさにこれらの「最善化的」規則帰結主義の諸原理である、と彼は主張するのです。従って「カント的契約主義」と「規則帰結主義」とを結合して、彼が「カント的規則帰結主義」と呼ぶものを作ることができます。「誰もが最善化的諸原理に従うべきである。なぜならこれらの原理だけが、普遍的法則であることを誰もが理性的に意志できる原理だからである」(同45頁)。この立場は人々が従うべき諸原理に関する内容においては帰結主義的ですが、われわれがこれらの

原理に従うべき理由の説明においては帰結主義的というよりもカント主義です。われわれがそれらの原理に従うべきであるのはなぜかという点、それらの普遍的な受容が誰もが理性的に意志できることだからであって、帰結主義者なら言うであらうように、究極的に重要なことは物事が一番うまく行くからではありません。

「カント的契約主義」は「規則帰結主義」を含意し、そして「カント的契約主義」のあるヴァージョンは「スキャンロンの契約主義」のあるヴァージョンと一致するのですから、三つの立場のすべてでもまた結びつけることができます。その結果生まれる「三重理論」は、「ある行為が不正であるのは、最善化的で、それだけが普遍的に意志可能で、合理的に斥けられない諸原理が、そのような行為を否認するときだけである」(同45頁)と主張します。パーフィットの信ずるところでは、立場の一致のこれらのさまざまの可能性から出てくる結論は、カント主義者と契約主義者と帰結主義者との間に深い意見の不一致があると考えるのは間違いだ、というものです。そうではなくて、「これらの人々は同じ山に別々の方向から登っているのだ」(同48頁)。

この中心となる議論を展開する際、パーフィットは理由と合理性に関する実質的な主張に多くを依拠しています。パーフィットが検討する諸理論のすべては、人々がさまざまな事

柄を欲したり行ったりするための理由の種類と、諸個人の行動がいかなる条件の下で合理的あるいは理性的であるのかとに関する主張を行います。従って、これらの理論についてのパーフィットの評価の多くは、この種の異なった主張の持つ力の評価からなっています。パーフィットはこのことを認識して、道徳に関する部分の前置きとして、これらのトピックに関する彼自身の見解の詳述と弁護を加えています〔第1部〕。

多くの哲学者は、行為についてのわれわれの理由はすべてわれわれの欲求によつて提供されると信じています。われわれの現実の欲求、あるいはわれわれが理想的状況の下で持つであろう欲求を最もよく実現することなら、それが何であれわれわれはそれを行うべき理由を一番多く持っている、というのです。パーフィットが「主観主義の諸理論」として分類する、欲求に基礎を置くそのような諸見解は哲学の中でも外でも大変有力ですが、パーフィットはそれらは深いところで見当違いだと信じています。そしてそれらに対する彼の批判は徹底的です。それらの見解はひどくもつともらしくない含意を持つだけでなく、最終的には「砂の上に築かれている」〔98頁〕、と彼は論じます。それらの見解が含意するところは、われわれが持つ理由はわれわれが理由なしに持っている欲求からその規範的な力を引き出している、ということだが、そ

のような欲求はそれ自体ではわれわれに理由を与えることができな、と彼は論じます。すると結局のところ、欲求に基づく見解が含意するのは、われわれは行為のための理由を何も持たない、ということです。そしてもつと根本的には、われわれは自分が実際に気にかけていることのいずれについても気にかけるべき理由を持たないという意味で、何も実際には重要でない、ということでもあります。

パーフィットはこれらの「荒涼たる」見解を斥けて、われわれはその代わりに価値に基づく客観主義を受け入れるべきだと論じます。この説によると、行為のための理由を提供するものはそれらの行為が現実化あるいは実現する価値（あるいは彼の言い方では、ある事柄をそれ自体のために行うに値するものたらしめる事実、あるいはある結果を善いものや悪いものたらしめる事実）です。このように理解すると、合理性に関する判断よりも理由に関する判断の方が根本的だということになります。というのは、パーフィットの見解によると、われわれが理由あるいは表見的理由に応えるときに、われわれは理性的だからです。また、われわれの信念が真であるならば、われわれがなすべき善い理由を持つことを行っているときにわれわれの行為は理性的だ、ということになります。これは実践的合理性に関する人氣のある説のいくつかと対照的です。後者はたとえば、実践的合理性を期待効用の最大化と同

一視したり、実践的な不合理性を非一貫性の一形態として解釈したりする説です。

トマス・スキヤンロンがその寄稿部分で述べているように、理由の方が合理性に先立つという考えはカントの見解とも衝突します。カントにとつては、定言命法の権威も内容も、理性的行為の要請によって理解されるべきものであって、人々が持つ理由についての何らかの独立のとらえ方によって理解されるべきものではありません。スキヤンロンが「理由に関するカント的構成主義」と呼ぶカントの見解について次のように述べている通りです。「理由（もつと厳密に言う）と、人が理由とみなさなければならぬもの」に関する主張は、理性的行為に関する主張、つまり、人が自分自身を理性的行為として見ることと矛盾せずに取りれる態度に関する主張に基づいていなければならない。正当化がこれと反対の方向で、理由に関する主張から合理性の要請するものに関する主張へと進むことは決してない」（第2巻10頁）。

ような仕方では築きあげねばなりません。このことは、これらの理論をカント自身の理論から、またクリスティン・コースガードのような今日の何人かの有力なカント主義者の見解からも、区別するものです。パーフィットが認めるように、彼は「理由」という、原始的で「定義できない」観念に依拠し、そして還元不可能に規範的な真理が存在するという点にも同時にコミットしているために、彼の見解はコースガードが「独断的理性主義」と名づけたものの一ヴァージョンになっています。そのような彼の見解は、コースガードのようなカント的構成主義者だけでなく、さまざまの形態の自然主義や非認知主義のようないくつかの極めて異質なメタ倫理学上の見方をとる論者からも抵抗を受けるでしょう。

それゆえパーフィットは第VI部で規範性に関する彼のとらえ方を説明し擁護しようとしています。彼は自らが「非形而上学的・非自然主義的認知主義」と呼ぶ見解を支持しますが、これは還元できない仕方では規範的な真理についてわれわれが知っていると言われる、ある直観的信念に訴えかけるものなのです。この見解は現実の時空の外にあると想定された部分に関する主張を行うという意味でのプラトン主義ではありません。またそれが直観に依存するからといって、規範的事実は知覚に類似した心理的能力を通じて把握されると示唆しているわけでもありません。われわれは正しさとか合理性といった規範

的性質の因果的な影響を受けた結果として、これらの性質の存在を探知するわけではありません。そうではなくて、われわれは数学や論理学の真理を理解するのと何か同じような仕方、規範的な真理を理解するのです。実際のところ、数学や論理学の推論自体、われわれが信ずべき理由を持つことに關する規範的真理を認めてそれに応えるということを含んでいる、とパーフィットは論じます。たとえば、 p であるということと、もし p ならば q であるということがともに真だということとは、 q であると信ずべき決定的な理由をわれわれに与える、とわれわれは認めます。これらの真理がわれわれの信ずべきことに関する真理であるのと同じように、われわれがなすべき理由を持つことについても真理がある、とパーフィットは主張します。

むしろパーフィットは、彼の意味で還元不可能に規範的な真理の存在を受け入れない哲学者がたくさんいるということをよく知っています。ニヒリストとエラー理論家は、すべての規範的主張は偽であると主張します。自然主義者は、規範的事実は自然的事実還元できると主張します。非認知主義者は、規範的主張は人間生活の上では重要だが、事実の言明として機能しているのでは全然ないと主張します。パーフィットはこれらの立場の影響力ある多くのヴァージョンを論じて批判しますが、その中にはサイモン・ブラックバーン、リ

チャード・ブランド、アラン・ギバード、リチャード・ヘア、ジョン・マッキー、バーナード・ウィリアムズの見解が含まれます。彼の論ずるところによれば、これらの見解のいずれも、われわれの思考の規範的な次元を十分に説明できず、そのような見解によれば規範性は幻想にすぎないことになり、ただ消えうせてしまふ、というのです。結局パーフィットは、このような見解はすべてニヒリズムに向かう、そしてニヒリズムは還元不可能に規範的な真理があると認めることに對する唯一の真正な代替案である、と信じているように見えます。彼はまた、規範性に関する「實在論」に對するコースガードのカント的反論にも説得されません。彼女の主張と反對に、彼はこう断言します。——規範性はその起源を意志に持つてゐるのではない。その逆に、われわれが信じたり欲したり行つたりすべき理由を持つことに関する、還元不可能に規範的な理由の存在がその起源である——。

やがて明らかになることですが、理由と規範性に関する議論「第I部と第VI部」におけるパーフィットの目的は、規範的道徳理論を論ずるときに彼が追求する目的とは極めて異なっています。道徳の場合の彼の目的は、対立すると考えられているある理論は実際には取斂するかもしれないから、それらの間の一見したところの不一致は消滅する、と証明することです。その一方、彼は理由と規範性に関する議論において

序文

本書には要約があるから、私はここで本書の内容についてほとんど述べない。本書は長いが、その中にはいくつかの短い本が含まれている。第Ⅲ部の中の重要なことは何一つ第Ⅱ部に基づいていないから、第Ⅰ部と第Ⅲ部だけを読むこともできよう。主として倫理学に関心がある人なら、第六章から第十七章までだけを読むこともできよう。主として理由と合理性とメタ倫理学に関心がある人なら、第Ⅰ部と第Ⅵ部だけを読むこともできよう。

シジウィックは自らの単調な大著『倫理学の方法』をいかにして書くに至ったかを述べる際、自分はカントとミルという「二人の師」を持っていたと言う。私の二人の師はシジウ

ィックとカントだ。

*₁ カントは古代ギリシア人以来、最大の道徳哲学者である。

シジウィックの『倫理学の方法』は、私の信ずるところでは、かつて倫理学について書かれた最善の本だ。プラトンの『国家』やアリストテレスの『倫理学』のように、それよりも偉大な業績である本は存在するが、シジウィックの本は、重要であり真でもある主張を他のどの本よりも数多く含んでいる。シジウィックがプラトンやアリストテレスやヒュームやカントほどには偉大な哲学者でなかったにもかかわらず、彼らよりもよい本を書いたのは驚くべきことではない。シジウィックの方が後に生きたからだ。ホメロスやシェイクスピアよりも後の詩人や劇作家はこの二人よりも優位に立つわけではないが、哲学は進歩するから、後に生まれた哲学者は優位に立つ。

シジウィックもカントも、ともに弱点も欠点も持っている。たとえばシジウィックは時として退屈で、カントは時として腹を立てさせる。これらの弱点の存在を認め、そしてわれわれがそのために失望したり意欲をなくしたりすべきでない理由を述べることによって、私はいくらかの人々がシジウィックの『倫理学の方法』とカントの数冊の本を読むか再読する

よう説得できるだろう。

カントとシジウィックはすばらしく対照的なペアだ。たとえは自分自身の業績を論ずるにあたってカントはこう書く。

^{*2}批判哲学は、理性の道徳的・実践的目的だけでなく理論的目的をも満たそうとする抵抗できない傾向に自信を持ち、いかなる見解の変更も、いかなる修正も、その他いかなる形態の再構築も、その余地がないと確信しなければならぬ。『批判』の体系は十分に確定した基礎によっており、永遠に確立している。それは未来のあらゆる時代の人類の高貴な目的にとっても不可欠であると示されよう。

シジウィックはこう書く。

^{*3}本書は何一つ解決しないが、一人か二人の人の考えをいくらか整理できるかもしれない。

カントは極めて独創的である。いくつかの崇高な主張を行い、激しく情熱的だ。シジウィックは自分がこれらの資質に欠けているということを知っていた。彼は友人にこう書いている。——「私は自分自身を批判することが好きだ。そして

この点について以下の定式化をした。

長所・常に考え深く、しばしば精妙だ。一般的に分別があり不偏的だ。対象に正しい観点からアプローチする。^{*4}

短所・筋道立てて整理することが下手だ。文体において堅苦しく、議論において本当に印象的なところや独創的なところが無い。」

^{*5}シジウィックはまた、自分の「冗漫で難解な退屈さという恐ろしい欠陥」にも触れている。

この最後の文句はあまりにも厳しすぎる。^{†1}シジウィックの本は長く、そしてその中のいくつかの章は今では無視できるが、冗漫ということは無い。シジウィックはめったに同じことを繰り返さず、多くの重要な点を簡潔に、かつ一度だけ述べる。またシジウィックの本は難解でもない。彼の主張と議論の中には複雑なものもあるが、ほとんどすべては明快に書かれている。

^{*6}シジウィックの退屈さはもつと多くの議論を必要とする。ホワイトヘッドはシジウィックの『方法』にすっかりうんざり

りして、そのため他の倫理学の本も一冊も読もうとしなかった。しかしケインズはシジウィックの回想録と書簡集を読んだ後で「私はこれほど退屈な本にこれほど引き入れられたことがない」と言った。イングランド国教会を論じてシジウィックは書いている。

^{*7} ケンブリッジで私はそれを何かこういふものと見るのに慣れている。つまりかつては生きて成長していたが、今では複雑な建物の中でよくわからない意味を持っている柱か支え壁であるというだけの理由で存在しているが、誰も今すぐそれを壊そうとはしないものだ。だが私はここでは、水から上がった大きな魚を見ているような気がする。スムーズに動きながら、陽気に成功への大道を進んでいる魚を。

さらに二つの文章を引用しよう。

^{*8} 疑いもなくイングランドの男たちは主として異常な時に恋に落ちるようだ。——読書会とか、海岸とか、外国のホテルとか、クリスマスとか、ともかく何か外的な状況あるいは支配的な感情が永遠の水を溶かす時に。残念なのは、この一時的な雪解けが長続きしないと、すべての利益が失われてしまうということだ。交差した二つの生涯の線がおそ

らくは永遠に離れてゆき、一層強い霜がおりてくる。

^{*9} 私は人間性の重荷を贅沢な生活という膝の上に置いていて、その結果その重荷をあまり感じていない。結局のところ、パスカルは実際正しかった。——もし人が無限の疑念を抱くならば、それがはらわたの中に水のように、骨の中に油のようにはいりこむならば、それは悔恨に苦しみ独房の中で生きるべきで、四七年産のポートワインやW・G・クラーク「ケンブリッジ大学の一九世紀後半の公定演説家」のさわやかな弁舌の中にあるべきではない。私は自分の部屋にはいると、奇妙な恐ろしい感じに打たれる。それがあなたに手紙を書く理由だ。だがまた——もしこの「時間は短い」という意識を強くなるままにしておくならば、それは全生涯を情熱的な一瞬に包み込むように思える。

世界が私の衝動を感じるか、私が死ぬかだ「出典不明」
こんなことを言って死んだ二流の人々のことを考えてみよ——そして——誰が気にするだろう？

蝶々も死滅を恐れるかもしれない

「ブラウニングの詩“A Toccata of Galuppi’s” XIII」

これは私には奇妙な気分だ。だが今日トランピングトンは私はクモを殺して「これも知覚がある」と言った。私は複雑な知覚以上の何物だろうか？

シジウィックは人を楽しませることもあった。そして彼の会話は「陽光きらめくさざ波の小川」と描写された。しかし『方法』の初版にはほんのいくつかの冗談しかなく、そのうちのいくつかをシジウィックはその後削除した。だがこの本の多くはうまく書かれている。たとえば、

*¹⁰「自分自身にしか従わない」という理想が〈代表民主政〉によって近似的にでも実現できると考えることは、一層明白な不条理である。というのは、代表議会は通常国民の一部だけによって選ばれるし、個々の法律は議会の一部分だけにによって可決されるし、自分が投票した一人のメンバーに反対して議会の過半数が通過させた法律にその人が合意したなどと言うのはばかげているからである。

あるいはもつと生真面目に、

*^{11†3}〈義務のコスモス〉はかくして実際には〈カオス〉に至り、

理性的行動という完璧な理想を形作ろうとしてきた人間性の長きにわたる努力は、不可避の失敗へと運命づけられてきたということが明らかになる。

この壮大で暗鬱な主張はカントの激しさをいくらか持っている。カントについて書かれた別の文章もそうだ。

*¹²私は、自分のすべての義務を神の命令であるかのようにみなすという道德的必然性の下に自分自身が置かれていると考える、という方便に頼ることができない——何かそのような〈至上の存在〉が実在するという思弁への資格も持たないのに。私はとるべき理由のない思弁的な真理を実践的目的のために信ずる義務を全然感じない。その程度といえ、これらの言葉が記述しているらしい心の状態を想像さえできないほどである——哲学的絶望の暴力的発作の際の一時的な愚かしい非合理性としてでなければ。

多くの名文句は全部引用するには長すぎる。そのような文章の一つは次のように終わっている。

*¹³利己的な人は、広い関心が与える高揚と拡大の感覚を欠いている。彼は一個人の幸福よりも有望な諸目的に向けられ

た活動に継続して伴う、もつと安定した穏やかな満足感を持ってない。彼は共感の入り組んだ反射に依存する独特の豊かな甘美さを感じられないのだが、その共感こそ、われわれが愛し感謝する人々のために行う奉仕の中に常に見出されるものである。利己的な人は、彼自身の生命のリズムと自分自身の生命が取るに足らぬ一部であるにすぎないもつと大きな生命のリズムとの間の不調和を、一千ものさまざまに感ぜざるをえない。

別の文章はこう終わっている。

「汝邪悪であれ」^{*14}「ミルトン『失樂園』第4巻110行」と言
つて、それにふさわしく自分の行為の恐るべき非合理性を
わずかに曖昧に意識していた——というのは、自分が感嘆
されるべき者になれる唯一のチャンスは、今到達している
下降の道の極にしかないという間違つた想像のために曖昧
にされているのだが——者でさえ、率直で首尾一貫した邪
悪さの中にあるに違いない。

^{*15} シジウィックは友人に、自分の本は「思考の厳格さ」を達
成しようと努めているから「いくらか無味乾燥で読みにくく
ならざるをえない」と警告した。しかしこの厳密さはしばし

ば見事に表現されている。たとえば友情を論ずる個所でシジ
ウィックは書いている。

^{*16} 〈常識〉が、すべての密接で強い愛着を見る時の感嘆とす
っかり同じではない共感、そして〈常識〉が、その愛情の
崩壊を見る時の不満とすっかり同じではない残念さ……

ドライだとはいえアイロニーの鋭さを持った文章も多い。
たとえば、

^{*17} 子どもはその生存を作り出した人々に感謝すべきだと言わ
れるかもしれない。しかし生活を幸福にすることなしの生
命だけでは、価値が疑わしい恵みであつて、生命の受け手
への配慮なしに与えられたときには、ほとんど感謝を引き
起こさない。

^{*18} AをBよりも幸福にすることについては何の正しさもなさ
そうだ——その原因が、Aがコントロールしない状況がま
ず彼を幸福にしたというだけのことならば。

^{*19} すると〈功利主義〉の結論は、入念に述べると次のような
ものになりそうだ。——〈ある行為を秘密にする方がその

行為を正しいものにする」という見解それ自体も比較的秘
密におかれるべきであり、また同様に、〈密教的道徳
は便宜にならなければならない〉というドクトリン自体も密教にし
ておかれるべきだ。

^{*20} 本當に透徹した批判というものは、特に倫理学では、ブラ
ッドレイ氏が決して習い覚えなかつた入念な共感の努力と、
彼が維持することができないらしい平靜な氣質とを要求す
る。

^{*21} 「この本は」決定的なように見えるが、論争的すぎること
によつて敗北している。この種の破壊的な攻撃の中には、
少なくとも公正さを気取るところがあるべきだ。

^{†4} シジウィックはそのアイロニーのために、実際には秩序紊
乱的であるときにも堅苦しく見えるかもしれない。たとえば
バーナード・ウイリアムズが、性道徳に関するシジウィック
の議論の時には少々勇敢だが「純潔という觀念をかなり無批
判に利用している」と書いた時、ウイリアムズは誤解してい
た。シジウィックは確かに「では〈純潔〉Purityが禁ずる
行動は何だろうか?」と書いたが、彼の書いていることを注
意して読むならば、彼の回答は「何もない」というものだ

いうことがわかる。イングランドで一八七四年に出版された
本で、性的快樂をそれ自体のために楽しむことに何の道徳的
反論もないと——慎重な表現をしているとはいへ——論ずる
のは、少々勇敢だという以上のことだった。

人々がシジウィックは退屈だと感ずるとき、彼らはシジウ
ィックの文体ではなく彼の最大の哲学的長所の一つに反応し
ていることが多い。シジウィックは日記の中でこの長所につ
いてうまいことを言っている。

^{*22} コントとスペンサーを読んだところだ。前からいつも、彼
らの知的な力と勤勉さに感嘆し、彼らのばかげた自信には
驚き以上のものを感じる。私には二人とも自己批判という
ことの意味を知らないように思われる。これは彼らの卓越
性と切り離せないものかどうかわからない。確かに私は自
分の自己批判がたくましい気迫ある著述への妨げになつて
いるとわかつてはいるが、その一方で、私の著作がいくらか
でも持つている価値はそれのおかげだと感じている。

シジウィックは自分の見解への反論の力を人並みはずれて
よく理解した。シジウィックがある論文を擁護するのを聞いて
ウイリアム・ジェイムズは言った。

*23 シジウィックは時にはいらだたしくなるほど率直な反省を示した。人は自分の敵に対してそれほど公正である権利を持たない。

たとえばシジウィックは論敵の本を論じて次のように書いた。

*24 私は本書をできる限り賞賛したい。……これはすぐれた能力を持った著者による書物である。……とはいえ——彼は私には全く間違っているように思われる。私は彼の理論をふさわしい尊敬をもって取り扱うことが難しい。疑いもなく、私も彼の眼にはそのように映るだろう。そしてわれわれのいずれも間違っているのだろうか？ 本書は倫理学について私をかなり憂鬱にさせた。

これらの美德のため、シジウィックの書いたものは読みにくくなることがある。一つの問題は、C・D・ブロードが書いたものだ。シジウィックは、

*25 休むことなく純化し、限定し、反論を取り上げ、それに答え、その回答に対するさらなる反論を見出す。それぞれの

反論と回答と再反論と再回答はそれ自体として立派なもので、著者の鋭敏さと率直さを限りなく証拠立てる。しかし読者はいらいらして、議論の筋を失いがちになる。机から頭を上げて、これまで感心し続けながらたくさん読んできたのに、今やほとんど何も覚えていないことに気づくのである。

『倫理学の方法』をわれわれが最初に読むときの印象は、そこに刺激的なものがほとんどないから、ある意味では最悪だ。だがこの本を再読するたびに、われわれは以前見落としていたいくつかの新しいよい論点に気づく。それは少なくとも私が見出したことだ。

シジウィックは自らを批判してこう書いている。

*26 私は独創的でない。私は毎日自分の思考を一層低く評価する。

この評言は厳しすぎる。シジウィックはいくつかの点で独創的だ。しかし彼の偉大さはそこにはない。カントやヒュームのような他の哲学者はもつと独創的で輝かしい。これらの哲学者はニュートンやアインシュタインのようなもので、

明々白々たる天才だ。シジウィックはもつとダーウインに似ている。彼は「ほとん^{*27}ど天才の域に達するほどのよいセンス」を持っていてと言われた。ブロードが言うように、『倫理学の方法』の中では「倫理学のほとんどあらゆる主要問題が極端に鋭く論じられている」。そしてシジウィックは極めてたくさんのことについて正しい。彼は古代と近代の倫理学の中の快樂主義・利己主義・帰結主義という三つの重要な主題について最善の批判的説明を与えた。またその本の全四部の中で一番長い部分で、彼は多元主義的な非帰結主義の常識道徳についても最善の批判的説明を与えている。シジウィックは間違いも犯して、そのうちのいくつかに私は注の中で言及するが、私の信ずるところでは、その数は多くない。シジウィックの『倫理学の方法』はこれらの事実のために、倫理学に関心を持つ誰もが読み、記憶し、そして他の人々も読んだと推定できる、最善の書物になっている。

シジウィックへの私の恩義はたやすく述べることができる。私が哲学の大学院生になった理由の一つは、いかにして自分の人生を過ごすべきかを考えていた時、本当に重要なものが何かを決めにくかったという事実がある。私は哲学者たちがこの問題に答えて賢くなろうとしてきたということを知っていた。私が失望したことに、私を教えてくれた哲学者と私が

「著作を読むように言われた哲学者のほとんどは、「何が重要か？」という問いには真の解答がないか、それどころかそもそも意味がないと信じていた。しかし私はシジウィックの本を古本で買って、彼が少なくともいくつかの事柄は重要だと信じていたということを知った。そして私が道徳哲学者の問うべき他の問題や解答のいくつかについて最も多くを学んだのはシジウィックからだった。

私は今やもう一人の師であるカントに向かう。私が最初にカントの『道徳形而上学の基礎づけ』を一九六〇年代に読んだ時、私はこの本が魅力的だが曖昧だと思った。それから三十年後私がこの本とカントの他の本の大部分を再読した時、私は意外にもカントの倫理学にとりつかれた。それから二、三年の間、私はそれ以外のことをほとんど考えなかった。

私がカントにとりつかれたことが私にエネルギーを与えたとはいえ、このエネルギーは最初ほとんど全く否定的なものだったと告白すべきだろう。私はカントが天才だということに疑われない。しかし私は他の多くの人々と同様、カントの主要な主張のいくつかに、彼の哲学のやり方にも、深く反対している。私がカントにそれほど反対する点に言及し、私の態度がどう変化したのかを述べることによって、何人かの

人々に、私がそうしかかったようにカントを無視しないよう説得することができるかもしれない。

カントはシジウィックが欠いているいくつかの重要な資質を持つているが、シジウィックが持っているいくつかの重要な資質を欠いてもある。シジウィックは明晰に書き、大体として首尾一貫しており、たまにしか間違いを犯さないが、これらのことはカントには言えない。

シジウィックの『倫理学の方法』と違って、カントの『基礎づけ』は最初に読む時がある意味では一番よい。読者を鼓舞する刺激的な主張があり、われわれは理解できないところは気にしないからだ。しかし『基礎づけ』を再読すると、われわれの多くは意気阻喪してあきらめてしまう。カントは偉大な哲学者かもしれないが、われわれには適さないと決めてしまうのだ。

最初の問題はカントの文体だ。正真正銘の悪文を哲学的に受け入れられるものにしたのはカントである。われわれは誰か別の人のひどい文章を取り上げて「こんな文章を書く人のものがどうして読むに値するか？」と言うことがもはやできない。それに対してはいつでも「カントはどうなのか？」と

答えられるからだ。

もつと深刻な問題もある。私がカントにとりつかれた時、私はカントの主要な主張と議論のいくつかをもつと明快に述べようとしてみたが、この仕事は非常にいらだたしいものだということがわかった。私はカントの複数の主張を一貫した見解にまとめることができなかつたし、カントの議論の多くは明らかに妥当でも健全でもないように思われた。カントの最大の崇拜者の中にさえ同じように感ずる人がいると知つていれば私の助けになつただろう。たとえばオノラ・オニールは『基礎づけ』をカントの本の中で「最も腹を立てさせる」ものだと言う。

カントが単一の一貫した理論を持っていたわけではない、と知ることも私の助けになつただろう。カントはある主張を受け入れているのかそれとも斥けているのか、とわれわれが問うとき、その答えはしばしば「両方だ」である。ケンプ³⁰はミスが書いているように「一つの文章を引用するだけでは全く決定的でない」。たとえばカントが「個々の時点における人間の義務は、自分にできるすべての善を行うことだ」と書いているとき、彼はこの主張が含意しているような（行為帰結主義者）のではない。ロールズは、彼がカントのテク

序論	iii
序文	xvii

要約	1
----	---

I 理由

第一章	規範的概念……………	31
1	規範的理由……………	31
2	理由を含意する善……………	39
第二章	客観主義理論……………	45
3	二種類の理論……………	45
4	理由に應える……………	49
5	状態が与える理由……………	53
6	快楽的理由……………	55

第十二章	普遍的法則……………	305
III 理 論		
39	われわれが苦しむに値しない理由	291
38	道徳が要請する自由	285
37	善の促進	275
36	正と善	269
35	カント的尊厳	263
34	二種類の価値	259
33	人格への尊敬	257
第十章	尊敬と価値……………	257
32	手段として害する	250
31	〈手段として〉と〈単に手段として〉	242
30	単なる手段の原理	233
第九章	単に手段として……………	233

40	不可能性の定式	305
41	自然法則の定式と道徳的信念の定式	315
42	行為者の格率	320
第十三章 誰もがそうしたらどうなる？……………		
43	各人「われわれダイレンマ	333
44	閾値の反論	340
45	理想世界の反論	344
第十四章 不偏性……………		
46	黄金律	355
47	希少性の反論と大きな取り分の反論	365
48	非「反転可能性の反論	368
49	カント的解決	373
第十五章 契約主義……………		
50	理性的合意の定式	379
51	ロールズの契約主義	382
52	カント的契約主義	391

補論 A	状態が与える理由	459
64	同じ山に登る	450
63	カント的帰結主義	443
第十七章	結 論	443
62	誰もが理性的に意志できること	438
61	決定的な非義務論的理由	433
60	不正を作り出す特徴という反論	428
59	利他的理由と義務論的理由	423
58	自己利益に基づく理由	418
57	カント的議論	416
56	帰結主義的格率	414
55	帰結主義の諸理論	409
第十六章	帰結主義	409
54	義務論的信念の制約	402
53	スキャンロンの契約主義	396

補論B 理性的非合理性とゴッティエの理論 473

補論C 義務論的理由 491

卷末注 497

出典に関する注 543

参考文献 7

索引 2

第2巻目次

IV コメントリー

連山のハイキング スーザン・ウルフ

目的それ自体としての人間性 アレン・ウッド (訳・奥野久美恵)
方法の不適合 バーバラ・ハーマン (訳・奥野久美恵)
どうして私はカント主義者ではないのか T・M・スキャンロン

V 回答

第十八章 連山のハイキングについて

第十九章 目的それ自体としての人間性について

第二十章 方法の不適合について

第二十一章 人数はどのようにして重要なのか

第二十二章 スキャンロンの契約主義

第二十三章 三重理論

VI 規範性

第二十四章 分析的自然科学と主観主義

第二十五章 非分析的自然科学

第二十六章 瑣末性の反論

第二十七章 自然主義とニヒリズム

第二十八章 非認知主義と準実在論

第二十九章 規範性と真理

第三十章 規範的真理

第三十一章 形而上学

第三十二章 認識論

第三十三章 理性主義

第三十四章 意見の一致

第三十五章 ニーチェ

第三十六章 最も重要なこと

補論DEFGHIJ

卷末注／出典に関する注

訳者解説

参考文献／索引